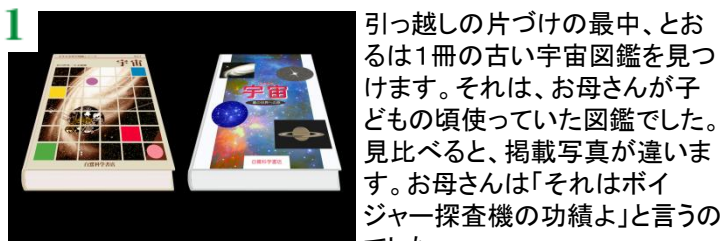




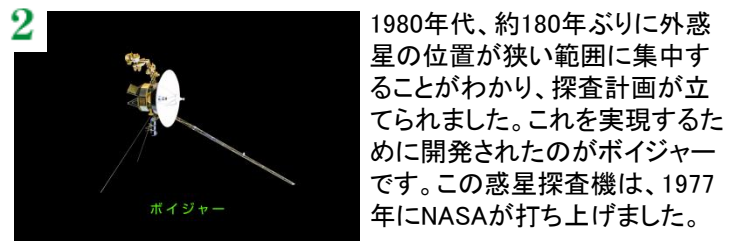
ボイジャーの旅 ~お母さんの図鑑~

“宇宙を探索する”ことは“地球を探る”ことでもあります。探査機ボイジャーが私たちにもたらしてくれた功績は、惑星や衛星の画像だけではなく。私たち生命が生きる意味を考える機会を与えてくれたボイジャーに感謝を捧げつつ、宇宙に想いを馳せます。そして、科学者とボイジャーとの心の交流。そんな温かなエピソードがクラシック音楽にのせて感動的に語られます。

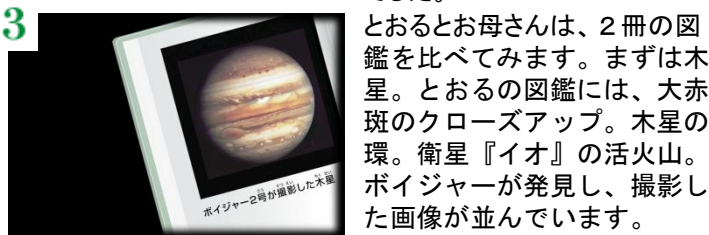
投影時間 24分 対象 小学校中学年～一般
登場人物 とおる、母親、佐治晴夫博士（鈴鹿短期大学学長）
素材 スライド/127枚 VTR/15分



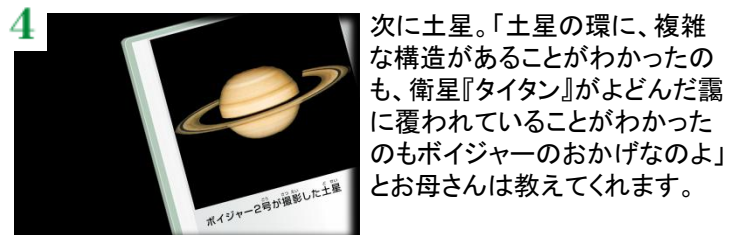
1 引っ越しの片づけの最中、とおるは1冊の古い宇宙図鑑を見つけます。それは、お母さんが子どもの頃使っていた図鑑でした。見比べると、掲載写真が違います。お母さんは「それはボイジャー探査機の功績よ」と言うのでした。



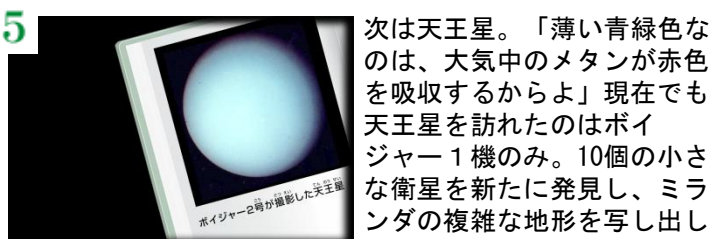
2 1980年代、約180年ぶりに外惑星の位置が狭い範囲に集中することがわかり、探査計画が立てられました。これを実現するために開発されたのがボイジャーです。この惑星探査機は、1977年にNASAが打ち上げました。



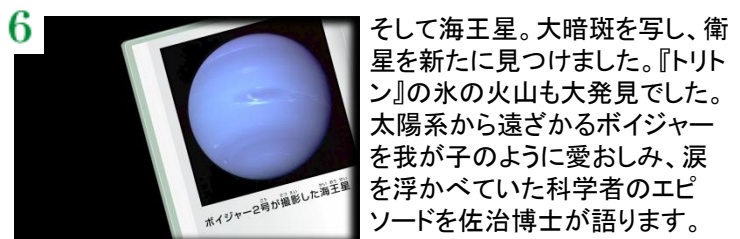
3 とおるとお母さんは、2冊の図鑑を比べてみます。まずは木星。とおるの図鑑には、大赤斑のクローズアップ。木星の環。衛星『イオ』の活火山。ボイジャーが発見し、撮影した画像が並んでいます。



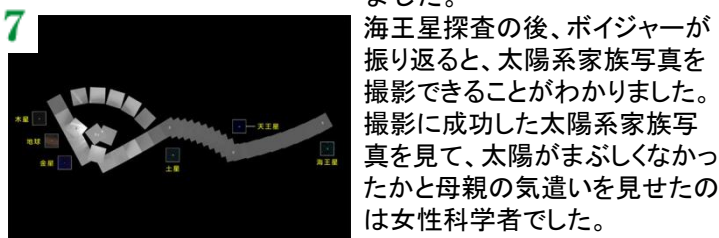
4 次に土星。「土星の環に、複雑な構造があることがわかったのも、衛星『タイタン』がよんだ霧に覆われていることがわかったのもボイジャーのおかげなのよ」とお母さんは教えてくれます。



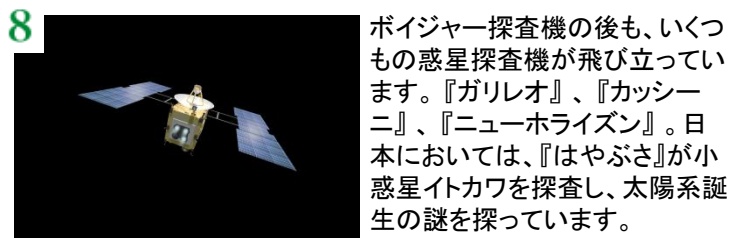
5 次は天王星。「薄い青緑色なのは、大気中のメタンが赤色を吸収するからよ」現在でも天王星を訪れたのはボイジャー1機のみ。10個の小さな衛星を新たに発見し、ミランダの複雑な地形を写し出しました。



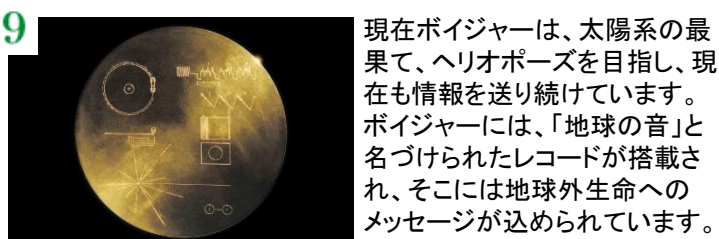
6 そして海王星。大暗斑を写し、衛星を新たに見つけました。『トリトン』の氷の火山も大発見でした。太陽系から遠ざかるボイジャーを我が子のように愛おしみ、涙を浮かべていた科学者のエピソードを佐治博士が語ります。



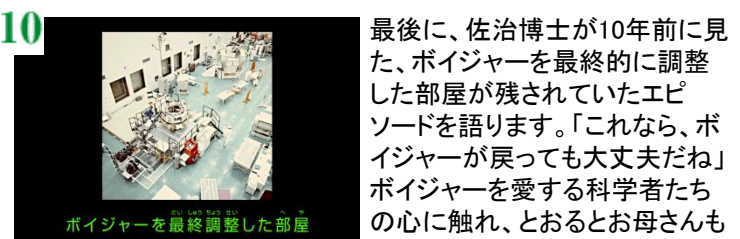
7 海王星探査の後、ボイジャーが振り返ると、太陽系家族写真を撮影できることがわかりました。撮影に成功した太陽系家族写真を見て、太陽がまぶしくなかったかと母親の気遣いを見せたのは女性科学者でした。



8 ボイジャー探査機の後も、いくつもの惑星探査機が飛び立っています。『ガリレオ』、『カッシーニ』、『ニューホライズン』。日本においては、『はやぶさ』が小惑星イトカワを探査し、太陽系誕生の謎を探っています。



9 現在ボイジャーは、太陽系の最果て、ヘリオポーズを目指し、現在も情報を送り続けています。ボイジャーには、「地球の音」と名づけられたレコードが搭載され、そこには地球外生命へのメッセージが込められています。



10 最後に、佐治博士が10年前に見た、ボイジャーを最終的に調整した部屋が残されていたエピソードを語ります。「これなら、ボイジャーが戻っても大丈夫だね」ボイジャーを愛する科学者たちの心に触れ、とおるとお母さんも温かい気持ちになるのでした。